
 学 会 記 事

第16回新潟血栓止血研究会

日 時 昭和63年11月5日(土)
午後3時より
会 場 有任記念館(2階)

一 般 演 題

1) ワーファリン療法中のビタミンK依存性凝固因子(II, VII, IX, X) および抗凝固因子(PC, PS)の動態

高橋 芳右・帯刀 巨	服部 晃・柴田 昭	(新潟大学第一内科)
和田 研・高桑 悦子		
吉野 紀子・花野 政晴		(新潟大学第一内科)
和泉 徹・荒井 裕		
柴田 昭		
林 千治		(新潟大学公衆衛生)

〔目的〕ワーファリン療法時にはビタミンK依存性凝固因子に加え抗凝固因子のPCおよびPSの低下もきたすが、その特徴を明らかにする。

〔対象〕長期ワーファリン服用者を対象とし、凝固因子およびPCを100例、PSを60例で検討した。更に別の30例でPCを詳細に検討した。

〔結果〕ビタミンK依存性凝固因子活性、抗原量はトロンボテスト値に依存して低下した。活性値は抗原量より低値で、しかもその比はトロンボテスト値と相関し、抗凝固療法が強いほどPIVKAの相対濃度が高いと考えられた。PCおよびPS抗原も凝固因子レベルと正相関して低下した。凝固因子抗原/PC抗原比はワーファリン療法の強さと無関係に一定であった。またfree PS/total PS比も一定であった。充分な抗凝固療法下でのPCを詳細に検討すると、total PC抗原とアミド活性は近似したが、Gla-PC抗原はより低値で、抗凝固活性は更に低値を示した。トロンボテスト値とは抗凝固活性とGla-PC抗原のみが正相関した。

〔結語〕長期ワーファリン服用時には凝固因子と抗凝固因子は概してバランスを保ちながら低下する。PIVKA-PCはアミド分解能を有するが、生理的機能は抗凝固活性に反映されるものと考えられる。

2) ITP に対する γ -globulin 大量投与の治療成績

—新潟県における多施設協同研究—

布施 一郎・花野 政晴	(新潟大学第一内科)
服部 晃・柴田 昭	
真田 雅好	(新潟市民病院)
佐藤 正之・村川 英三	(県立がんセンター)
飯泉 敏雄	(県立吉田病院)
黒川 和泉	(長岡日赤病院)
中村 忠夫	(小千谷総合病院)

ITP に対する γ -globulin 大量投与は、高価な反面、急な止血を要する場合や、手術時、出産時などに有効である事が報告されている。今回、我々は新潟県下における ITP に対する γ -globulin 大量投与の成績を多施設協同研究により明らかにしたので報告する。対象症例は26例(急性1例、慢性23例、慢性期急性増悪2例)であり、投与方法は300mg/kg/day以上、5日間連続で行なった。治療効果は投与後5日目までの判定で5万以上に増加したものを有効とする38.4%で、2万以上5万未満の増加が29.1%、不変例が32.5%であった。治療効果に及ぼす因子として、性差、年齢、前治療の有無、併用薬剤の種類、発症後の経過期間、治療前の血小板数について検討すると、いずれにおいても有意差はみられなかったが、女性において有効率が高い傾向にあった。有効例での血小板数のピーク値は1例を除いて5~10日にあり、手術等を前提としての投与の際には、約1週間前からの投与が安全と思われた。

3) 脳梗塞再発防止のための患者別コントロールによるアスピリン・チクロピデン併用療法—中間報告

服部 晃	(新潟大学第一内科)
柴田 昭	(第一内科血栓止血班)
伊藤 粹子・渡部 透	(新潟南病院)
滝沢慎一郎・矢沢 光良	(新潟こばり病院)
本間 義章	(佐渡総合病院)
栗林 和敏	(新潟聖園病院)
飯泉 俊雄	(県立吉田病院)

患者毎に出血の起きない範囲で血小板機能を強く抑制する事により再発の防止を意図する本研究は進行中であるが、これまでの成績をまとめ、従来の成績と比較した。対象：臨床所見またはCTから診断されたTIA 6, RI-ND 1, 脳こう塞血栓66, 計73(男48, 女25)例。年齢74.0±10.9歳。発症または診断からの経過10.5±19.2月。

方法：アスピリン 10~60mg/日、チクロピデン 100~300mg/日の併用で凝集能をADP 10 μ Mで50~60%、